

校長特別授業② 「校歌」について

私は、「校歌」にはこだわりがあります。

大きな声で歌っていなかったり、一生懸命歌っていなかったりすると多分他の先生よりもかなり腹が立ちます。これには訳があります。

それは、自分が実際に「校歌」の制作に立ち会い、その時の苦労や感動を知っているからです。

今日は、校歌にまつわる私のお話を聞いてください。

ちょっと長いのですが、そして御津中学校の話ではないのですが「校歌がどのように制作されるのか」について、知っておいて欲しいのです。

私が、新任で赴任した中学校は、新設校でした。

もの凄くきれいで、モダンな校舎と、TDLのような門。

初めて行ったときは、学校とは思えず、通り過ぎてしまったほどでした。

新設校だったので、職員室に机もイスも無く、全教職員が輪になって立ち自己紹介をしました。

それから、自分たちで机やロッカー校長室のソファを入れました。

一番若く男性の私は、正直こき使われました。

職員会議がお昼過ぎの3時に始まり、夕食休憩を挟んで9時までかかりました。

「長い一日だったなあ、やっと帰れる」と思ったのが甘くそこから学年会儀、終わったのが夜の11時。

「やっと帰れる」と思ったのも甘く、用事を頼まれ、終わったのが、夜の一時。

「先生ってこんなに忙しいのだ」実感した一日でした。

そしてこんな日々は、4月3日の開校式、5日の入学式・始業式まで続いたのです。

本当は次の学校に異動するまで、5年間続いたのですが。

新設校というのは、校訓・校則・制服・体操服・・・全てが決まっていない状態です。

音楽の先生は私しかいなかったもので、校歌制定委員会の副委員長になりました。

みなさん、校歌を作るのには何が必要だと思いますか。

まずお金です。

いくらぐらい必要だと思いますか。

およそ350万円です。

部活動が終わってからPTAの役員の人と校区の家纠纷一案、一件寄付に回ります。

「夜分すみません ○○中学校のものです。校歌を作るので寄付をお願いします」

「夜遅くにご苦勞様です」と快く寄付に応じてくれるご家庭もあれば、「関係ありません」とばかり「バ



350万円



ン」と勢いよくドアを閉めるご家庭もありました。

資源回収も3回行いました。企業や工場に協賛金を依頼しました。

苦労もありましたが、予算350万円のめどが立ってきました。

校長先生が、町の偉い人と相談して、作詞者が決まりました。

作詞家の岩瀬ひろし先生は、校区出身で、「黒猫のタンゴ」等ミリオンセラーのヒットを飛ばした作詞家です。

その方の紹介で作曲者も決まりました。

当時日本作曲家協会会長・日本合唱連盟会長の中田喜直先生です。

教科書にも「夏の思い出」「雪の降る街を」「小さな秋見つけた」等先生の作品が取り上げられています。

歌詞にしたい言葉を町全体に募集しました。

2,000枚以上の応募が来てしまいました。

職員室の私の机の横の床に積みました。

こんなに高く積まれた応募用紙。

当時はパソコンなどありませんから、一枚ずつワープロに打ち込んでいきます。

2,000枚ですから、しかも部活動が終わってからの作業。

打ち込みが終わって多い言葉順にして、ベスト30を多目的スペースに書き出して掲示。

今思い出しても気が遠くなるような作業でしたが、生徒たちが寄ってきて「アッこれ俺が書いたやつ」と喜んでいる姿を見ると疲れが吹き飛ぶ思いでした。

それから、校歌に入れて欲しい言葉を作詞家の岩瀬先生に送りました。

しばらくして「歌詞が出来上がったので、作曲者の中田先生にも送りました」という連絡が入りました。

さらにしばらくして冬になったころ、中田先生から連絡が入り、「2月上旬に取りに来てください」と連絡が入りました。

2月1日に取りに行くこととなりました。

寒いころでした。

この「寒いころ」というのがこのあと重要な伏線となります。

「一年で一番寒いころ、校歌の受け取りに作曲の先生のところに行った」というところをおぼえておきましょう。

教頭先生から「手土産をもって行きなさい」と5,000円渡され、有名なちくわセットを買いました。

当日は6時前に目が覚めました。

リビングで父が、「今日東京に行くだろう、天気予報で関東地方は大雪だと言っているからではなく出たほうがいいぞ」と言うのです。

確かにどの天気予報でも関東地方は大雪だと言っています。

念のため、予定より1時間早く家を出て、「こだま」に乗り込みました。

豊橋の空は高く高く青く澄んでいました。
「本当に雪なんて降るのかなあ」と思っていたのですが、神奈川県に入るころから急に空は暗くなり始め、雪がちらつきはじめました。
「新横浜駅」についたときにはほとんど雪国。
「新横浜駅」を通過したわたしを乗せた新幹線はなかなかスピードが上がりず、ついに止まってしまう、いつまでたっても動きません。
「雪のため前の車両が止まっているためしばらくお待ちください」
車内アナウンスが流れました。



周りのサラリーマンは焦っています。
そこへいくと私は余裕をもって1時間も早い新幹線だったので、落ち着いていました。
早め早めの行動はこういうときに役立ちます。
ところが1時間近く経っても新幹線は動きません。
念のため、早めに出た1時間は消えてしまいました。
こりゃいかん、と電話をしようと車内公衆電話に行きました。
当時は携帯電話なんて文明の利器はありませんでしたからね。
ところが、その公衆電話ですが、何回かけても通じないのです。
車掌さんに「この電話繋がりません」と聞いてみると、「新幹線が込み合っており、電波が混線して通じません」と言われてしまいました。
このままでは遅刻してしまいます。
社会人として遅刻は許されません。
しかも相手は有名な日本作曲家協会会長・日本合唱連盟会長の中田先生です。
焦った私は車掌さんに「今すぐ、ここで降ろしてください」と頼みました。
「ダメです」
そりゃそうです。
そしてまったく動かない、電話も通じない新幹線に閉じ込められて1時間。
私には2時間にも3時間にも感じた時間でした。
そうしてやっと動き出しましたが、のろのろです。
田んぼの真ん中を走っている自転車と同じくらいです。
やっと東京駅についたのが12時。
中田先生との約束の時間まであと1時間。
間に合うか間に合わないか、ギリギリです。
まずは連絡です。
「もしもし、〇〇中学校の峯村と申します。大雪で今遅れて東京駅につきました。もしかしたら遅れるかもしれません」
電話口は秘書さんだったのですが、さっそく叱られました。
「中田先生は、日本作曲家協会会長・日本合唱連盟会長。それがどれだけ忙しいのか、あなたはわかってらっしゃるの?」「大変申し訳ございません」
平謝りに謝っていると、中田先生が電話口に出てくださいました。

「いやあ、今テレビを見たけれど、大変な大雪だねえ。私は、2時にNHKが来るので、それまでには気を付けて来てくださいね」

ゆっくりとした、柔らかく、優しい声で、話をしてくれました。

私は、電話を切ると、ちくわセットを抱え、八重洲中央口のタクシー乗り場にダッシュしました。階段を下りる。

かすかに東京の景色が見える。

そこは雪国でした。

何もかもが真っ白です。

「ヤバイヤバイヤバイ！」

タクシー乗り場はディズニーランドのアトラクションの如き長蛇の列です。

「ヤバイヤバイヤバイ、本当にヤバイ！」

しかし、そんな雪国状態でも流石は東京。

次から次へとタクシーが来るので、なんとかタクシーに乗ることができました。

これならなんとか間に合いそうです。

タクシーに飛び乗った私は運転手さんに言いました。

「六本木の中田音楽事務所までお願いします。」

「\$ & ‘()’ &=」

「はい？あの、すみませんが六本木までお願いします」

「#= \$」 ‘()’ \$ (7)」

運転手さんの言葉が聞き取れないのです。

この運転手は、宇宙人なのでしょうか。

いったい何語をしゃべっているのでしょうか。

もう一度すごくゆっくり話しました。

「六本木の中田音楽事務所までお願いします。」

「わのー きな一たぐしー ひっぱればかちゃくちゃね一な一」

「は？おじさんわかりません」

「きのーからタクシー運転手として初めて勤めたのでわからない」

ヤバイヤバイヤバイ、さっきよりヤバイ。

「おじさん 六本木はわかりますか？」

「ろっぽんぎ？ちょっとまっとれ」

ダッシュボードを開けてのんびり地図帳を開き始めてしまいました。

約束の時間は刻々と迫ってきます。

運転手さんが地図帳を調べている間、次のタクシーが待



っています。

「なんとなくわかった」

「とにかく六本木までお願いします」

「それでいいのか」

「それでいいから 早く行ってください！」

タクシーが動き出し、とにかく六本木の方角に向かいました。

暫く走ると交差点の信号機に「六本木」という看板がかかっていました。

「すみません、ここで降ります！」

下車するとやっぱり雪国。

雪が 20 センチ以上積もっていました。

ちくわセットだけは大切に抱えながら歩いて行きましたが、普通の革靴だったので、何回も転んでしまい、いつの間にかちくわセットの紙包みはどろどろになって、角に穴が開き、そこからちくわのビニールが出てしまっています。

住所を頼りに歩き回りましたが、さっぱりわかりません。

郵便局に飛び込みました。

「すみません」

「はい？」

怪訝そうな顔で見られます。

「六本木の中田音楽事務所に行きたいのですが、場所が分からなくて困っています。教えてもらえますか」

「ごめんなさい。配達の人たちが全部出ていてわかりません」

「そうでしたか、ありがとうございました。」

雪はますます激しく降ります。

郵便局を出るや否やすっ転んでしまいました。

時計を見るとついに本来の約束の時間だった 1 時になっています。

「どうしよう」

たどり着けなかったら、本当にどうしよう。

もはや恐怖でしたが、それでも立ち止まるわけにはいきません。

私は、今度は交番に駆け込みました。

交番の中は暖かく私のメガネは真っ白に曇りました。

二人のお巡りさんが、私を見てびっくりしています。

スーツはびしょびしょ、ズボンはどろどろ、ボロボロになったちくわセットを抱えています。

「事件ですか、事故ですか？」

「あ、いや、道に迷って困っています。」

「ああ、どちらまで」

「六本木、中田音楽事務所です。」



「ちょっと待ってくださいね。」

大きな地図帳を出して机に広げて見せてくれました。

「今ここです。ここをまっすぐ行くと三叉路がありそれを左に行って 500 メートル程行くと左側にビルが見えてきますからその 2 階です」

お巡りさんの指先を見て「これなら行ける」と思い込んでしまいました。

お礼を言って交番を出て、中田音楽事務所に向かいました。

人の話を最後まで聞かないととんでもないことになります。

そのうち三叉路がありました。

でもその三叉路のすぐ横にも別の三叉路があるのです。

「どっちの三叉路だ？」とりあえず、左側をどんどん進んでいきました。

すると、とうとう六本木でなくなってしまったのです。

絶体絶命です。

時計を見ると 13:10

「どうしよう」

「もう一度交番まで戻ろうか」

「交番まで戻ったら 13:30 を超えてしまう」

「今日校歌を持って帰れなかったらどうしよう」

「いっそ沖縄にでも逃げようか」

そんな考えが頭をよぎりはじめたころ、見れば宅急便のトラックがやってきます。

最後のチャンスです。

私は、車道に飛び出でてトラックを止めました。

ああ、生徒のみなさんは真似しちゃいけませんよ。

トラックの運転手さんが窓を開けて「危ないじゃないか、何やっているのだ」怒鳴ります。

私はトラックに駆け寄り運転手さんに説明しました。

いかつい顔のトラックの運転手さんでしたが、なんということでしょう、「今から隣に行くから、のりな」と言って下さったのです。

いかつい顔のトラックの運転手さんが神様のように見えました。

「ありがとうございます」「本当にありがとうございます」

トラックに乗ってすぐ、到着しました。

運転手さんに最敬礼をして 2 階に駆け上がりました。インターフォンを鳴らします。

「はい」

これはさっき電話で私を叱りつけた秘書さんの声です。

「〇〇中学校の峯村です。大変遅くなり申し訳ございません」

ドアが開きました。

秘書さんがさすがにびっくりした顔で私の全身を眺めます。

「まああ、なんて格好ですの？」

奥から中田先生も出てきてくれました。

「時間がないから早く上がってきなさい」

「いや、でも…」

私は、上がらせてもらうことに躊躇しました。

ものすごく高級そうな絨毯が、ふかふかと敷き詰められています。

私は歩くと「ぐちゃぐちゃ」と音がするほどどろどろです。

「さあ、いいから上がりなさい」

そう言っていただいたので、恐縮しながら上がらせてもらいました。

一番奥のリビングに招かれました。

これがまた高級そうな L 字型のソファが置かれているゴージャスなリビングです。

「さあここに掛けて」

「いいですか」

「いいから座りなさい」

座るや否や「はい」と楽譜を渡されました。

「今から私が伴奏を弾くから歌ってください」

「は」

「それを録音して、先生方や授業で使ってください。じゃあ始めますよ」

中田先生はピアノの前に座るや、すぐに前奏を始めました。

まだ楽譜をもらって 10 秒くらいしか経っていません。

「大地にしっかり根を下ろし…」

何か所も間違えました。

歌い終わると「ここの音程が違っていて、ここのリズムがこうで、ああで」

とご指導アドバイスをいただきました。

「もう一度録音します。」

そう言って中田先生は、また弾き始めました。

2 回目は、先ほどよりはうまく歌えましたが、まだミスはありました。

中田先生は「まあいいでしょう」と言ってカセットテープを渡されました。

「どうやって来られました」「タクシーで来たのですが…」

などと話をしていると「ピンポン」インターフォンが鳴り、NHKのお迎えの方がお見えになりました。

「帰りはどうするの」と聞かれ「わかりません」と答えると中田先生は、地下鉄までの地図を書いてくれました。

そして、最後に中田先生の直筆の校歌が収められた大きな額縁を渡されました。私は、ボロボロになったちくわセットを「豊橋の名物です。包みはボロボロになってしまいましたが、中はきっと大丈夫です」と渡してきました。

そして、帰りは額を抱えカニのように横歩きで歩いていきました。

通行人がこっちを見て笑っていますが、気にしてられません。

今度滑って転んだら額縁のガラスが粉々になってしまいますからね。

何とか地下鉄に乗り、東京駅に到着しました。

でもすんなり三河には帰れませんでした。

雪はまだ降っていたのです。

新幹線は全面ストップ。

とにかく私は、新幹線ホームに行き止まっている新幹線に乗り、とにかく動くのを待ちました。

2時間以上待って、東京駅を出発したのですが、この新幹線は、掛川止まりとなりました。

掛川まで行き、次の新幹線に乗り換え、豊橋駅に到着したのは夜の九時過ぎ。

駅のホームから学校に電話を掛けました。

出ません。

教頭先生の自宅に電話しました。

「今帰るか、遊んできたのか」

「違います。東京は雪で電車が止まって大変だったのです」

帰ってきて翌日の朝の職員打ち合わせで私が歌った「校歌」を職員に聞いてもらいました。

生徒たちにも覚えてもらうためにこの日から「朝・お昼・下校」で、私の歌った一か所間違った校歌が全校中に流れることになりました。

近くの地域の人から「毎日先生の歌った校歌聴いているよ」と言われ大変恥ずかしい思いをしていたある日、校長室に呼ばれました。

「2月26日に岩瀬先生・中田先生夫妻をお招きし、校歌制定発表会を行います。校歌を歌うだけだと五分ほどで終わってしまうので、吹奏楽部で岩瀬先生中田先生の代表曲をメドレーにして演奏してはどうかと思うのだができるかな」と聞かれました。

「できます」と答えました。

「そうか、それじゃあ頼むぞ」

「はい、わかりました」

早速楽器屋さんや楽譜を取り扱っている業者に楽譜を発注しました。

数日で業者さんからリターンの電話がありました。

「すでに廃盤になっています」

「売り切れてありません」

結局一曲も注文することができませんでした。

翌日、校長先生に「先生大変申し訳ございませんが、楽譜がないので吹奏楽部が演奏することができません」と伝えました。

すると校長先生は「演奏してもらわないと困る。昨日招待状を来賓百名に送ってしまい、その招待状に『本校吹奏楽部による中田・岩瀬両先生の代表曲をメドレーで演奏』と書いて発送してしまった。だからやってもらわないわけにはいかない」

「えーと、それはどのように？」

「君が編曲すればいいじゃないか」

「私ですか？」

「できないのか？」

「いや、できないとは言いませんが…」

「それなら良かった。じゃあよろしく」

私はまたもや頭がパニックです。

職員打ち合わせで、先生方に両先生の曲のCD、レコード、カセットテープ何でもいから持ってきてくださいとお願いしました。

学校にある中田先生歌唱CDを聴いて耳コピーを音楽準備室で始めました。

まず、メロディーをコピーしコードを付けます。

それを吹奏楽譜に変換します。

これがなかなか難しいのです。

例えば、クラリネットやトランペットは、ピアノの「ド」の音を吹いてもらうためには、楽譜に「レ」と書きます。

ホルンだと「ソ」と書かなくてはなりません。

この日は、学校に泊まり徹夜して中田先生の楽譜のスコアを仕上げました。

翌日先生方が、岩瀬先生のレコード、カセットテープをもってきてくれました。

私は、朝から授業を級長たちに任せ、編曲づくりに取り組みました。夜の8時くらいにスコアが完成し、そこからパート譜を作り続けました。

私は今、58歳です。

58年の人生の中で2日間貫徹…つまり睡眠ゼロだったのはこの時だけです。

夜中の3時頃に完成し、各パート譜をコピーし朝練習に着た生徒たちに渡せるようにした後、意識がなくなりました。

意識が戻ったのは、3時間目の途中、級長たちが授業をしてくれていたときです。

そしてその2週間後、校歌制定発表会がありました。

大成功でした。

舞台の上で指揮をした時の全校生徒たちの声の迫力。

ものすごい声量でした。

衝撃で体が10センチくらい後ろに下がった気がしました。

中学生でもこんな迫力のある歌声が出るのだと教えてもらいました。

校歌制定に際してどれだけのドラマがあったか、そうやって作られた校歌がどれだけ学校の誇りであるのか、そして地域全体が学校にかけてくれていた期待。

全校生徒が知っていたからこそその歌声、迫力だったのでしょ。



さて、御津中学校の校歌が制定されて、もう 74 年になります。

その時の校歌制定の様子は、今となっては知ることはできません。

御津中学校 校歌が制定されて

74年

でも、わたしが〇〇中学校で味わったのと同じようなドラマが、この御津中学校でもあったはず
です。

その時の校歌制定委員会の方に話を聞ければいいのですが、残念ながら限られた時間の中で、
当時の校歌制定委員会の方を探し当てることは
できませんでした。

誇り 有り難さ

だから、校歌制定という貴重な経験をした自分の話をしました。

豊川市立御津中学校は、当時、御津町にたったひとつの中学校でした。

地域のみなさんが御津中学校にかける期待や熱意も、そのときの〇〇中学校に勝るとも劣らぬものが
あったはずです。

多くの先輩方が、御津中学校の生徒であるという誇りと、地域の応援の有り難さを胸に、腹のそこからの
大きな声で、校歌を歌ってきたはずです。

御津中生であるという誇り、立派に成長して欲しいという地域の方の熱い期待。

それを校歌で表現して欲しい。

御津山を崩すほどに迫力のある歌声を期待しています。